北九州市立尾倉中学校　学校通信　第68号

尾倉（おぐら）

＜校訓＞
自主
創造
協力

令和3年9月9日（木）発行
校長　栗 原 博 巳
北九州市八幡東区尾倉三丁目10番1号
HP: www.kita9.ed.jp/ogura-j/

＜学校教育目標＞
豊かな心をもち、健やかでたくましく行動する生徒の育成～みんなで考え、みんなで取り組み、みんなでつくる尾倉中学校～
＜目指す生徒像＞
① 感性豊かで、意欲的、主体的に学習する生徒
② 健康で明るく、思いやりのある生徒
③ 礼儀正しく、奉仕の精神に満ちた生徒
◇ 元気のいい挨拶・礼儀・身なり・学習規律と集団生活における規律とマナー

チームワーク（来月の体育大会に寄せて）＜読み物資料＞

新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言のため、9月の体育大会は10月に延期されました。体育大会やクラスマッチなど学級の輪を高める行事ですが、今日は読み物資料を紹介します。1年生にもわかる内容だと思いますので是非読んでください。

☆☆

今日は○区立中学校が参加して行われる秋の祭典、連合陸上競技大会の日なのである。待ちに待ったこの大会では、私たちの学校は、昨年、一昨年と連続優勝しているのである。今年もまた勝てるだろうかという期待と不安を胸にしながら、我が家をあとにした。

国立競技場のある千駄ヶ谷駅へ向かうわたしの足は小刻みにふるえ、電車までも興奮して揺れているようにさえ思えた。選手でもないのに、そんなに緊張することないじゃないの、と自分自身に問いかけてみた。それでも、足の震えは止まらなかった。

わたしは、陸上部のマネージャーなのである。選手にもなれない私は、それを悔しいと思ったことが何度もあった。いっそのこと、やめてしまおうと思ったこともあった。そんなことを、あれこれ思いながら、秋葉原駅で総武線に乗り換え、窓の外の景色をぼんやりとながめていた。

何度、この電車に乗ったことだろう。練習が遅くなり、華やかなネオンサインをながめながら帰ったこともあった。学校は町中にあるため、運動場はネコの額ほどしかなく、クラブの練習は、主にこの国立競技場のサブトラックで行うのである。

選手になっている友達を、心から祝福してあげようと思いながらも、なにかふっきれない気持ちがあったことも確かだった。だが、それらの思いも、今日は選手の人たちを力一杯応援することによって、なにもかも捨ててしまおうかと決心して、玄関をあとにしたのであった。そんなとりとめもないことを考えているうちに、千駄ヶ谷駅に着いた。電車からホームに一歩踏み出したとき、大きく吸った空気のすがすがしさは、何ともいえなかった。さあ、いよいよ始まるぞ。

わたしは、心を引き締めて集合場所へ向かった。クラスメートのほとんどがすでに来ていた。わたしは、先生に到着の報告をすませ、選手席へ行くため、クラスの列から抜け出した。選手でないわたしにも、立派に責任を果たすべき役割が待っているのだ。入場行進に参加するのだ。陸上部のユニフォームに着替え、チームメートの並んでいる列の最後尾に入った。「次に入場してまいりますのは、前年度優勝校、○○中学校選手団です。」アナウンサーの澄んだ声が響きわたり、ブラスバンドの演奏に合わせ、行進が始まった。○○中学校と書いたプラカードを持つ先導者から私まで、なんと長い行列だったろう。引き続いて開会式である。役員や来賓の方達から祝辞、開会宣言やルールの説明などが終わると、いよいよ競技開始である。プログラムどおり、100メートルから始まった。ピストルの音で、8名の選手が飛び出した。きれいなスタートである。選手達の足、足、足。走り終えた選手の表情は、苦しさにゆがんだ顔、安堵の顔、笑みを浮かべた顔、様々ある。

応援席から、声を振り絞り声援していた私は、恥ずかしさやみじめさを意識する暇もないほど、競技の一つ一つに夢中になり、吸い寄せられていた。

さて、いよいよ午前の部最後の種目であるリレーの予選だ。1年の女子が終わり、2年女子の番ある。スタートを切る。好調だ。三走の明日香さんのところではすでに独走である。あと100メールよ、がんばって。と、そのときである。明日香さんからバトンを受けたアンカーの由美子さんが走り出そうとした直後、ぽろりとバトンを落としてしまったのだ。転々と転がるバトンを拾って、再び走り出したときは、もうゴール寸前のチームもあった。由美子さんは、バトンを握りしめ、力一杯走ったが、もはや予選を通過する見込みは全くなかった。

選手席で応援している生徒が、何か言い始めた。非難や不満である。一発勝負の大事なころで、ミスをおかした由美子さんを苦々しく思ったのだろう。私はしかたがないことだと思った。由美子さんが選手席に戻ってきたら、ただ、「残念だったね」と、一言言おうと思った。その反面、心のどこかで、バトンを落としてしまった由美子さんを責めているもう一人の私がいたことも事実であった。

しばらくして、リレーの選手が戻ってきた。由美子さんはどうしているだろうかと、そっと見てみた。由美子さんは、唇をかみしめ、膝の上に顔を伏せるようにして泣いていた。周りの人たちは気にしないでと、繰り返し言っていた。だが、由美子さんは顔を上げず、じっとしていた。

そのとき、走り幅跳びで優勝したみどりさんがメダルを持ってやってきた。みどりさんは、先ほどのリレーの選手でもあった。そして、泣いている由美子さんの傍らでメダルを見せながら言った。

「由美子、そんなに気にすることないわよ。ほら、点を稼いできたわよ」と。それを聞いていた私は自分を恥じた。情けないとさえ思った。由美子さんを責めるなんてとんでもないことだった。みどりさんの優しいに感動した。みどりさんはわかっていたのだ。バトンを落とした当人が、他の誰よりも強く、自分自身を責めていたことを。

わたしは改めて考えてみた。スポーツとは何か。身体を鍛えることや、勝負に勝つことよりも大切なことに違いない。そして、それ以上に、人としての思いやりや真心を自分の中に守り育てていくことを忘れてはならないと思った。今、わたしの目前にいたみどりさんの行為や態度がそれなのだろう。先生は口癖のように言う。「スポーツは、選手で活躍することや勝つこと以前に、もっと大切なものがある。それが何であるか、探してみなさい」と。

今の私には、それが何であるかわかりかけてきたようである。

●スポーツの世界では勝ち負けが必ずついてきます。でも、それ以上に大切なものを見つけることができたら体育大会やクラスマッチ、部活動の大会は成功だったといえるのです・・・。